

## F-3 家庭経営の変動に関する生活史的研究——M家 家計記録を資料として

### (3) 戦中における消費生活の構造

郡山女大家政 O小林和子 深谷笑子 他4名

目的・方法 前報告と同じであるが、本報告では、戦中、昭和12～20年(第4期)16～20年(第5期)をとりあげた。

結果 第4期は他の雑費の比率が8時期中、最高であり、主なものは軍人援護会等への寄付で、昭和14、15年はとくに多い。臨時費は昭和12～14年間に長男の応召、6女の婚礼、母の葬式により増大した。交際費も上昇を続け、その主なものは香典である。長男の戦病帰還後の療養による保健衛生費の膨張は、住居費と教育費の縮小によりカバーされている。第5期は保健衛生費の比率が8時期中、第6期に次いで高く、その大部分の医療費は長男の相次ぐ入院・手術などのためである。交際費の比率も著しく高いが、前期まで香典が最も多かったのが、昭和16年から、贈品・土産が1位となっている。この理由については、交際において現金の度合が高まったことも考慮せねばならないであろう。食料費の比率は前期よりやや多いが、インフレの進行を考慮すれば、実質的な増加とはいえない。戦時中の物資統制時代にもかかわらず、肉が多く買われているのは、長男の療養の栄養物として用いられたとも考えられる。昭和18年は次男の戦死により、葬式および法事の臨時費が非常に多い。教養娯楽費は少ないが、昭和17、18年には、長男が病床で読む本代も含まれている。被服費は8時期を通じて最低であるが、衣料の切符制が実施された時期であり、長男の医療費増大のため圧迫されたと思われる。教育費は家族周期的に第4、5期とも必要が非常に少ない。以上、第4、5期は長男の病気のため、他の生活費が圧迫された特殊な家計費配分構造で、戦争の影響の大きさを示している。